ベストピア
Bestopia
2019年8月号
第390号
bestopia.jp
パリ通信
第92号

猛暑「思考停止」

猛暑の8月も終わろうとしています。来年のオリンピックの頃の気候が平穏であることを祈ります。

１．増えた欧米人の広島訪問

日本人は戦争への道を開いた歴史と原子爆弾の甚大な被害を受けたことで8月は敗戦と広島・長崎を忘れられません。今年も甲子園の全国高等学校野球第101回大会のさなかに8月6日と9日更に15日を迎えました。平和と戦争の相反する事象を同時に学ぶことができる貴重な月といえます。

ベストピアを熱心に読んでくださっているMさん親子が8月6日広島に出かけ、強く感じたことは来訪者の半数近くが欧米の方であったということ。2016年5月のオバマ前大統領の訪問効果が更に広がっている。アメリカ国民も複雑な思いから長い間、広島長崎を敬遠してきましたが、今では戦いを超えた観点から広島・長崎を見るようになったのでしょう。

原爆資料館は超満員で夕方閉館近くに行ったそうですが、熱心に資料をのぞき込む欧米人が半数以上であったと言います。年間の外国人の来館者数は2015年33万人から2018年は43万人で、年間を通しては25％ですが、集中する８月では、半数が外国人の来訪となったのでしょう。

外国からの来訪者を国別に統計が発表されると、近隣諸国との微妙な関係がもっと浮き彫りになると私は考えます。日韓関係が深刻になったきっかけは民衆の力でした。政府間では決着がついていると公式に発言されますが、民衆レベルでは遺恨が残っています。遺恨のエネルギーは深いところから湧いてきますから強力です。個人の心理と同じです

私が毎年感動するのが、被爆５０周年（平成７年）から始まった小学生による「平和の誓い」です。広島市長の平和宣言に続いて、こども代表が「平和への誓い」を述べます。これは、「こども平和のつどい」「こどもピースサミット」を開催し、世界のこどもたちが話し合った結果を平和への決意として述べるもです。2019年は次の通りです。

～「平和への誓い」～

私たちは、広島の町が大好きです。
ゆったりと流れる川、美しい自然、

「おかえり。」と声をかけてくれる地域の人、どんなときでも前を向いて生きる人々。
広島には、私たちの大切なものがあふれています。
昭和２０年（１９４５年）８月６日。
あの日から、血で染まった川、がれきの山、皮膚がはがれた人、たくさんの亡骸、
見たくなくても目に飛び込んでくる、地獄のような光景が広がったのです。
大好きな町の「悲惨な過去」です。
被爆者は語ります。「戦争は忘れることのできない特別なもの」だと。
私たちは、大切なものを奪われた被爆者の魂の叫びを受け止め、次の世代や世界中の人たちに伝え続けたい。

「悲惨な過去」を「悲惨な過去」のままで終わらせないために。
二度と戦争をおこさない未来にするために。国や文化や歴史、違いはたくさんあるけれど、大切なもの、大切な人を思う気持ちは同じです。
みんなの「大切」を守りたい。「ありがとう。」や「ごめんね。」の言葉で認め合い許し合うこと、寄り添い、助け合うこと、相手を知り、違いを理解しようと努力すること。
自分の周りを平和にすることは、私たち子どもにもできることです。
大好きな広島に学ぶ私たちは、互いに思いを伝え合い、相手の立場に立って考えます。意志をもって学び続けます。
被爆者の思いに、私たちの思いを重ねて、
平和への思いを世界につなげます　　令和元年（２０１９年）８月６日
（アンダーラインは小原です）

２．原子力の平和利用という信仰に似た現象か？

⑴原子力発電のはじまり

原子力発電が導入される過程で、その危険性を知っていた政治家や一部の科学者を除いて、高度な知識層の人々を含めて、石油に代わる不滅のエネルギーと信じてしまった。
当時反対した科学者もいたと思われるが、民衆の力がそれを片隅に追いやってしまった。
民衆に信じ込ませることが腕のいい政治家である。

チェルノブイリだけでなくアメリカにもイギリスにも福島と同じような被害と未解決の問題を抱えながら、原子力文化は衰えを知らない。武力の原子力化は進めば進むほど、武力の無意味さを学べるはずであるが、その競争は激しくなるばかりで、日本も遅れてはならないと追随している。優秀な学者は武力の行使は地球を滅ぼすことを知っている。

⑵新しい信仰の始まり

さて、今、ビッグデーター信仰が始まろうとしている。
①大手企業の発信の一つを引用しよう。
ビッグデータ×AIがもたらす価値とは（AIとは記憶や学習といった人間の知的な活動をコンピューターに肩代わりさせることを目的とした研究や技術のこと。
（ＡＩはArtificial Intelligenceの略）

IoT（Internet of Things）の発展により、世の中のあらゆる事象をデータとして取得できるようになりつつある今、取得したデータから新たな価値を創造し、ビジネスや生活にフィードバックするという動きが加速しています。大量のデータから新たな価値を導き出す、ビッグデータやAIは、これからの社会に欠かせません。
ITで処理できる世界は日々拡大を続けており、データ量やデータの種類も飛躍的に増大しています。

②AIと「ビッグデータ」を関連づけた記事をもう一つ紹介しよう
数々の逸話を生み続けているAI（人工知能）だが、人間には勝てないといわれていた囲碁の勝負で、AIが世界最高峰のプロ棋士を破ったこともその1つである。このAIの開発者は、AIに何万枚もの棋譜を読ませたり、2台のAIで何万回も囲碁対戦させたりした。
AIの仕組みやAIの賢さを支えているのは、人間では到底不可能な学習量を難なくこなす能力である。

「人間が処理できないほどの大量の学習」は、いまでは「ビッグデータ」と呼ばれている。
現代のビックデータ時代は、2010年ごろから始まったとされる。AIにどれだけ多くのビッグデータを与えることができるかが、開発競争のカギを握っているといってよく、その意味ではビッグデータはAIの力の源泉である。

ビッグデータは資源ごみと似ている。両者とも、かつては普通に捨てられていた。
まず資源ごみだが、環境に対する意識が低かった時代、資源ごみと本当のごみの違いはなかった。ところが「ごみから資源を回収する技術」「住民の分別の習慣」「環境をよくしようという意識」「リサイクル事業のビジネス化」の4要素が合わさったことで、資源ごみはお金を生み出す資産になった。（引用終わり）

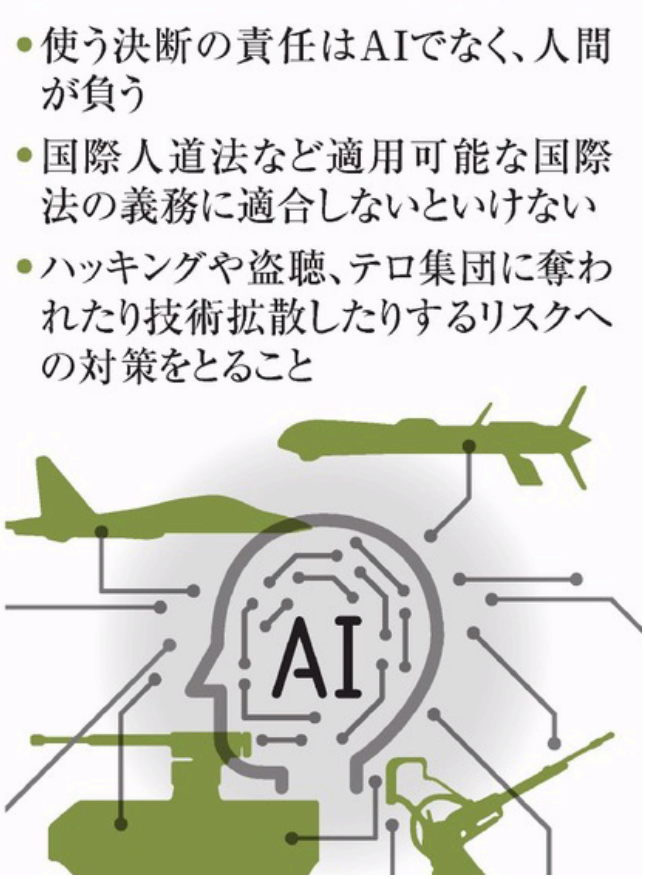
かくて、若い経営者の間ではAI×「ビッグデータ」の話題が頻繁になり、その知識のないものは常識の無いものという風潮さえみられるようになった。不謹慎で嫌悪感を感じるこの話題が信仰になる危険性、原子力平和利用と同じ道を辿るような感じがする。朝日新聞は8月19日朝刊トップ記事で「AI兵器が攻撃判断禁止」の見出しをつけた。以下引用

　人工知能（ＡＩ）を搭載するロボット兵器について、２０日からスイス・ジュネーブで開かれる国際会議で、兵器自らが標的を選んで殺傷の実行を判断（判断の過程がブラックボックスになる）することは認められないとする指針案が正式に採択される見通しになっ

た。法的拘束力はないが、国連安全保障理事会の常任理事国や日本など主要国はいずれも同意する見込みで、ＡＩロボ兵器を開発する上での事実上の国際基本ルールとなる。

　対象となるのは、ＡＩで自律的に動き、標的を殺傷する能力をもつロボ兵器。その先駆となる兵器や技術は、米ロやイスラエル、韓国などが開発を進めているとされる。

　人権団体などは「ＡＩは判断を誤る可能性があり、ＡＩロボ兵器そのものを禁止すべきだ」と主張。各国は２０１７年から専門家を派遣し、非政府組織（ＮＧＯ）などを交えて国際ルール作りを模索してきた。（中略）



日本政府は、殺傷能力がある完全な自律型兵器は開発しないという立場だが、人間の関与が確保されるなら、兵器にＡＩを搭載することは「ヒューマンエラーの減少や省力化」につながると研究を進めている。（朝日新聞2019/08/19朝刊トップ概略）

③鉄鋼大手が、製鉄所での操業トラブルに悩んでいる。「鉄は国家なり」と称された高度経済成長期につくった設備の老朽化に加え、団塊世代のベテラン技術者の退職が相次いでいるためだ。現場でのトラブルを未然に防ぐノウハウをどう継承していくか。解決策として期待されるのがＡＩ（人工知能）の導入だ。（朝日新聞2019/08/20朝刊3面)

上記引用で（判断の過程がブラックボックスになる）の文言は私の挿入である。判断に人間の心が関与できないという意味である。戦争に心はない言う人も多い。しかし、殺傷を命じられた兵士にも良心があり、後々その呵責に悩まされるのである。AIには良心が芽生えるのか。

ビッグデーターの提供には善悪混交している敢えて善なるものに反対する意見も投書される。AIはそれも取り入れる。日本政府の見解にもあるように、もはやこの研究は止まらない段階に達している。私も含めコンピューターを利用する者は無意識に、その研究に加担している。私の趣味志向などは適格に把握され、次に買う物が案内されてくる。

宗教家や学者、大学の総長等が命がけで「人間」を守る情報を発信しなければ、この民間信仰には勝てない。かって坂村真民という詩人がいた。彼は「詩は万法の根源」といって

詩を作り庶民に発信してきた。詩でもってしか世界の平和、人間の幸せは語れないと感じたからだろうと私は思う。詩人の感性は未来への危機感も予知する力がある。

20世紀の初頭既にマックス・ウェーバーも警告を発している
「この巨大な発展が終わる時,まったく新しい預言者たちが現れるのか、
あるいは、かってのの思想や理想の力強い復活が起こるのか、それとも（そのどちらでもなくて）一種の異常な尊大さで粉飾された機械的化石化と化することになるのか。まだ誰にも分からない。それはそれとして、こうした文化発展の最後に現れる「末人」たちにとっては、次の言葉が真理となるのではなかろうか。
「精神のない専門人、心情のない享楽人、このもの「無」のものは人間性のかって達したことのない段階にまで、すでに登りつめたと自惚れるだろう」と。（プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神。岩波文庫版大塚久雄訳p366)（アンダーラインは小原）

３．「わたしの幸せあなたの幸せ」裏話２

学者でも、専門家でもない私がこの種の本を少ない読者とはいえ、公にするには、何が一番肝心かを考えました。現役時代ならば「名を売りたい・利益を得たい」と思ったでしょう。それらが出来ないと悟って隠退した今それらは第一義的ではありませんでした。その目的はもう少し後に述べることにします。

⑴何が一番大事か

「何が一番大事か」それは、読者を欺かないことでした。読み手に決定権があるわけですから、何を書いても、その危険性を知りつつ、欺瞞は絶対避けようと思いました。事例は事実のみ、公にしても誰にも迷惑をかけない事例だけを選びました。最も忠実にさらけだしたのが自分の生い立ちです。これはどの本にもないものだと今も思っています。

TAが暗い学問として識者から敬遠されていることは本文にも書きましたが、TAの目的は「幼児期に描いた人生脚本を、最良の自分になる人生計画に書き換える」ことにありますから、生育歴は直視しなければなりません。他人の生育歴は長い観察ができる医師と学者だけができることであり、専門家に求められる倫理があり、慎重さが求められます。

実は私にもためらいがありました。姉に育てられたことを書かざるを得ません。その姉が昨年来、体調を崩し十分な療養もできず、苦しんでいる姿を見るにつけ、感謝の気持ちの方が強く、今更過去の分析でもあるまいとの念が強くなってきました。その私の気持ちが反映されたのか出版の時期がどんどん遅れ一時は断念も視野にはいっていました。

姉の介護を弟夫婦に任せ、こんなことを書いていいのか。自問自答が続きました。編集は最終段階に入ってきましたが、スムーズに進みません。その時期には姉は危篤状態を繰り返して、5月に入ってからは会話は不可能になりました。予定の出版日を過ぎても本は出来上がりません。ついにたまらず編集協力者に胸の内を語りました。

本は5月20日頃ネットに掲載され、姉はそれを確認した如く6月14日召天しました。
本の238頁にその苦悩を行間に滲ませました。改訂するときは表現を変える予定でおります。このようにこの拙著の根幹をなす「幼児期に描いた人生脚本を、最良の自分になる人生計画に書き換える」ところの事例は自分自身のことで説明をしました。

⑵価格決定について

誰も在庫を持たず出版できるオンデマンド印刷が出版界で徐々に力をつけており、特に私のような名も無いものにも出版できる機会を与えてくれるシステムです。最も魅力あることは自分の原稿をそのま活字にできることです。只、困ったことは価格設定です。これも自己決定できるのです。その説明は受け承認していたのですが実際には混乱しました。

「こんな本が、こんな値段か」と言われが怖く、2000円を希望しました。一冊売れる毎に20円程度の持ち出しになると後日連絡が入り、それが理解できず、一時は自費出版に切り替えようかと考えました。初期費用の捻出にかかったのですが、問題は在庫と販売ルートでした。このような過程を経て@2436円が決定され、印税は18円となりました。

持ち出しにならなければ、家庭経済に支障はないと判断しました。これは懸命にして賢明な判断であったと思います。装丁の立派な出来をみて、書店に並べば売れるだろうと思いますが販売ルートはアマゾンのみです。手にとって判断出来ませんのでホームページに本書の目次より詳しい項目までの目次を載せました。

⑶第10章感性論哲学とTA

はじめの計画ではこの試論を掲載しようと考えていましたが、種々の事情で中止いたいました。感性論哲学を学んでおられる方で興味がある人はbestopia.jpを開いて頂き、左のサイドメニューにその粗原稿を載せましたので参照ください。

拙著にの末尾に掲げた参考文献に「『こころ』はいかにして生まれるか」（脳科学者の櫻井武著）は感性論哲学原理を更に切磋琢磨するためにも参考になります。又芳村思風先生の先見性にも驚嘆します。脳科学からこころを論じるときの接点があります。感性論哲学は常に進化すると言われていますから、既にこの領域は突破されているかも知れません。

長らく芳村思風先生のお話を伺っておりませんので、不案内の所はお詫びします。
又「０歳から１００歳までの哲学入門・考えるとはどういうことか」の梶谷真司（哲学者）は「考える体験としての哲学はーーー問い、考え、語り、聞くこと」なのである（P34）と記しています。

読み込んでいきますと「感ずる」ことが避けて通れないことに気づきます。探してみてください。ご一緒に読書会ができれば幸いと思い、この情報を発信します。